

## University Academic Repository

"A study of ""~aru"" and ""~iru"" employed in a conversational style"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Lin, Lin メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/264">https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/264</a>

## 研究論文

# 日常会話に見られる「～アル／イル」構文形式

A study of "~aru" and "~iru" employed in a conversational style

林 林  
LIN Lin

### <要 約>

従来の日本語教育の多くは、「日本語学の視点」に立ったものであった。それに対して、本稿では、「コミュニケーションのための文法」という観点に立ち、日常会話における「～アル／イル」構文形式と、文末形式の使用実態とを分析し、それを踏まえた日本語教育のあり方について考察する。主に日本語母語話者によるインタビューの会話（約13時間分）データを調査した結果、日常会話では、引用節内を除き、これまでの日本語教科書で提示されてきた文型と、裸文末という形はほとんど使われないということが明らかとなった。その調査結果の考察から、日本語教育における存在表現の導入にあたり、とくに、会話を主な目標に据えた日本語コースでは、「～に～があります／います」「～は～にあります／います」以外のパターン、及び文末に後続要素を加えた表現を初級レベルから提示し、教えるべきであると考えられる。

### <キーワード>

存在表現、「～アル／イル」構文、裸文末、後続要素、コミュニケーションのための日本語教育文法

### 1. はじめに

日本語の教育現場において、存在表現としての「アル／イル」を使った構文形式（以下は「～アル／イル」構文）を教える場合は、下記の（1）（2）のような、「～に～があります／います。」と「～は～にあります／います。」という定型化した例文や練習が一般に多く提示されている。

- (1) ここに電話があります。／ あそこに佐藤さんがいます。
- (2) 冷蔵庫は台所にあります。／ 佐藤さんは会議室にいます。

また、初級レベルの日本語教育で、動詞「アル」「イル」は、すべて (1) (2) のような「あります」「います」として取り上げられる。一方で、「～あるんです／～あるんじゃないでしょうか」といったモダリティ表現を伴う述語の表現等は、ほとんど見られない。ところが、自然な日常会話においては、上記 (1) (2) のような文型の使用は極めて少なく、むしろそれと違う文型パターンがよく見かけられる。したがって、日本語教育を日常生活とより結びつけたものとするためには、日常会話でよく見られる表現についても必要に応じてシラバスにとりいれていくべきだと考えられるが、そのためには、その使用実態を調査し、分析する作業が必要となる。

そこで本稿では、日常会話の自然な流れにおける「～アル／イル」構文形式の使用実態を考察する。「アル／イル」以外の述語は考察の対象外とする。データとして用いるのは、日本語母語話者による約 13 時間分のインタビューを収録したコーパス（以下は「コーパス」、詳細は後述）である。

本稿の構成は、次の通りである。まず 2 節では、存在表現の日本語教育での扱いと先行研究を概観する。3 節では、本稿で用いたコーパスの概要説明を行い、4 節では、使用傾向の考察と結果を提示し、5 節では、教育現場での扱いとのかかわり合いを述べ、最後に 6 節では、結論と今後の課題を述べることとする。

## 2. 日本語教育での扱い方と先行研究

### 2-1 日本語教育での扱い方

まず、代表的な日本語教科書での文例を見ておく。

- (3) a. 事務所に田中さんがいます。  
b. ロビーにテレビがあります。  
c. ラオさんは部屋にいます。  
d. 本は机の上にあります。 (『新日本語の基礎 I』第 10 課)
- (4) a. あそこに佐藤さんがいます。  
b. 机の上に写真があります。  
c. 家族はニューヨークにいます。  
d. 東京ディズニーランドは千葉県にあります。

(『みんなの日本語初級 I 本冊』第 10 課)

- (5) そこに なにが ありますか。  
 ここに でんわが あります。  
 ここに なにが ありますか。  
 そこに テレビが あります。  
 あそこに なにが ありますか。  
 あそこに ベッドが あります。  
 ……  
 れいぞうこの そばに なにか ありますか。  
 はい、あります。  
 なにが ありますか。  
 とだなが あります。  
 れいぞうこの 上に なにか ありますか。  
 いいえ、れいぞうこの 上には なにも ありません。  
 れいぞうこは どこに ありますか。  
 れいぞうこは だいどころに あります。  
 やさいは どこに ありますか。  
 やさいは れいぞうこの 中に あります。  
 ……

(『日本語初歩 I』第 3 課)

これらの存在表現は、いずれも「～に～があります／います。」と「～は～にあります／います。」の定型化として初級の早い段階で導入されている。次の表 1 は代表的な日本語教科書おける「～アル／イル」構文の扱いである。

表 1 日本語教科書や参考書などでの扱い

(○=扱われている。×=扱われていない。「後続要素」は「～ますか」を除外する。)

		みんな	初歩	新基礎	げんき
名詞句	～に～が V	○	○	○	○
	その他	×	×	×	×
	～は～に V	○	○	○	×
	その他	×	×	×	～は～です
文末	～ます。	○	○	○	○
	～ます+後続成分。	×	×	×	×
	～ません。	○	○	○	○
	～ません+後続成分。	×	×	×	×
	～る。	×	×	×	×
	～る+後続成分。	×	×	×	×
	ない。	×	×	×	×
	ない+後続成分。	×	×	×	×

(備考) みんな:『みんなの日本語初級 I 本冊』、初歩:『日本語初歩 I』、新基礎:『新日本語の基礎 I』、げんき:『初級日本語げんき I』。  
 また、文型の表示では、「V」で「アル／イル」の動詞を示す(以下同)。

表1から、「～は～にV」の代わりにコンピュータ表現の文例をあげている『初級日本語げんきI』以外、全体として次の3点を指摘することができる。

- (i) 「～に～がV」と「～は～にV」は、いずれも定型化されたまま提示されている。
- (ii) 本動詞「アル/イル」（否定形を含む）は、「～ます」形だけが提示されている。
- (iii) 文末はすべて「～ます。」「～ません。」という裸の言い切り文末（以下は「裸文末」）で提示されている。

以上のことから、現在の日本語教育における「～アル/イル」による存在表現の扱いについては、「～に～があります/います。」と「～は～にあります/います。」だけが提示されるという傾向を指摘することができる<sup>1)</sup>。

しかし、上記の文例では、特に(5)について言えば、そのような会話が実際に行われるのは、日本語の授業中だけであろう。現実のコミュニケーションにおいて、次のような形式が多く目にするものである。例えば、（下線は筆者）

- (6) つまり、位置変化動詞にはヲ>ニ語順の優勢な動詞群（「運ぶ」型）だけでなく、ニ>ヲ語順の優勢な動詞群（「載せる」型）も存在するのではないかという直感が筆者にはある。

（『日本語教育』120号:25）

- (7) ま例えば一、省略、っていう、まあ、まあ、どの言語にもあるけれど日本語でも、かなり際立ってありますよね。
- (8) もちろん農業はあるでしょうけど。
- (9) ああ、そうですか。あの、実際にそういう、援助を必要としている外国人の方は、あの地域に沢山いらっしゃるんでしょうか。
- (10) 仏教では三世通観の眼という言葉がありまして、過去世、現世、来世。

（以上は「コーパス」）

(6) (7) (9) の文では、なぜ「～に～がV」という文型と同じような意味でありながら、「～が/は～にV」の形式が使われている。また、(8) (9) では、「～に～がV」という文型に従うならば、「が」を使うべきところを「は」で置き換えられている。(10) では、「に」のかわりに「で（は）」が使用されている。これらの日常会話で使われる形式が学習者を困惑させることが多いのが現実である。

つまり、実際のコミュニケーションにおいて「～アル／イル」構文は、これまでの教科書で提示された固定化した文型ではなくて、その場の状況と談話の目的などに従って、話し手ではその他さまざまな形式で使われているわけである。ところが、上述の教科書の文例の分析でみたように、従来の日本語教育のシラバスが、「まず文法項目ありき」という形式優先であること、そして日本語の使用実態を考慮していないことなど「日本語学の視点」に依存した扱いである<sup>2)</sup>ことから、実際のコミュニケーションで使われる文例がとりあげられることが少なく、日本語教育と日常生活の接続がうまくいっていない傾向にあると指摘したい。

## 2-2 先行研究

存在文の先行研究においては、一般に存在文型の存在・所在の意味合いと語順を取り上げるものが多いようである。三上(1960)は、「机ノ上ニ(ハ)本ガアル」を「存在兼所在」を表す文、「本ハ机ノ上ニアル」を「所在」を表す文であるとし、存在文の無標の語順は「位格+不定なモノ+有無多少」であると述べている。また、有標の語順である「本ガ机ノ上ニアル」は、「本の存在に重点を置いた文」としている。

久野(1973)は、存在文を「不特定な事物の有無多少を表す文」とし、LSV(Lは体位を表す)が無標の語順であることを構文論的に証明している。

佐伯(1976)は、「存在文は、『表現の主語』たる位格のその後に事物の存在状態描写をこととする主述文がおさまった形で慣用され、それがそのまま別種の文としての型を獲得していったものとみなされる。」とし、また、「このような文種をあらたに設定することがシタクスの発展にどれだけ寄与するかとなると、今のところ何の見通しもたっていない」との見解を述べている。

寺村(1982)は、「物理的存在」を表す語順について「場所が先に来るのがふつうの語順のようである」と述べている。また、存在の場所を表す補語は「準必須補語」としている。

益岡・田窪(1992)は、「いる」と「ある」が用いられる構文を「存在・所在の構文」と呼び、存在を表す構文の基本は「(場所)ニ+(存在の主体)+ガ+イル／アル」の形であるとしている。

郡(1996)は、「存在文」を「存在するものと存在するという事実を同時に提出する文」と定義し、「～に～が」は無標の語順として認知的に妥当であるとする一方、「～が～に」は「存在文」の有標の語順の場合と、「存在文」ではなく存在自体が前提となっており、どこに存在するかを表す「が格」についての叙述文の場合があると指摘している。

一方、林(2007)では、文における名詞句の役割を検討するなかで、これまでのいわゆる存在文型の意味は、本動詞の存在、所在の意味によるものが少なく、むしろ「が」と「は」による構文の循環性の表現機能に依存するところが大きいと指摘した。

総じて言えば、従来の存在文とその文型に関する先行研究においては、日本語学の立場から意味的、統語的な視点からの考察は多くなされてはいたものの、学習者が実際に会う存在文型について、データの収集とその考察を加えたものは少ないようである。

### 2-3 本稿の立場

本稿の立場は、以下の論者による、従来の日本語教育の問題点の指摘と「学習者の視点」にたったその見直しの提案を基としている。

まず、小林（2007）は、従来の日本語教育の問題点とその改善の方向について次のように述べている。

日本語教育の現場では、コミュニケーション能力の獲得のためにもっとも必要なことは、教室活動をコミュニカティブにしたり、できるだけ生の（authentic な）教材を用いたりといったような、「教え方」に関する努力や創意工夫であると考えられてきた。しかし、これまでみてきたように、「いわゆる初級文法」と呼ばれるものの中にも、不要な文法項目があったり、必要な文法項目が入っていなかったりする。これは、これまでの文法教育観やシラバス設計の理念が、「日本語の基本的な文型に関わる要素」という、日本語学の視点に全面的に依存したものであり、そこには「会話における頻度」、あるいは、「対人関係における安全性」といった、ことばの使い手である学習者の視点が、まったく欠けていたことを意味している。

初級から上級へとつながる文法シラバスの配列は、もちろん、「基本から応用へ」「易から難へ」とされるべきである。しかし、何をもって「基本」「易」とするか判断は、日本語学ではなく学習者の視点に基づいてなされるべきであろう。そして、それこそが、日本語教育における文法教育観の基盤になるべきものだと考える。（小林 2007:40）

また、白川（2007）は次のように指摘している。

これまでの日本語学的文法では、「こういう文型がある」というところから出発して、その文型を「どう使うか」と発想していたが、新しい日本語教育文法では、「こういうことを言いたい」というところから出発して、その目的のために「この表現が必要」と考えたい。（白川 2007:16-20）

以上のように、小林、白川は、従来の日本語教育文法で見直しすべき点として、以下の三点を指摘している。①不要な文法項目はないかどうか。つまり、実際のコミュニケーションで使う場面はほとんどないものや、実際の会話での頻度が低いものがふくまれていないかど

うか。②実際のコミュニケーションで使われている形式や用法を反映しているかどうか。③実際の会話での運用を考えた場合に必要な文法項目が漏れていないかどうか。

そこで本稿では、以上の旨を踏まえて、コミュニケーションのための日本語教育文法（運用力につながる教育文法）をめざす基礎研究として、会話から調査した実例データに基づき、「～アル／イル」構文形式の使用実態を考察し、整理していくことを試みる。そして、今後のさらなる分析の手がかりにすることを期したい。

### 3. 調査データ範囲

本稿でデータとして利用したのは、インターネット上で公開されているコーパスである。コーパスは北九州市立大学国際環境工学部コーパスプロジェクトによって構築されたインタビュー実験形式による会話データである。その「研究プロジェクトは、日本語母国語話者（NS）と非母国語話者（NNS）の発話パターンの比較分析と日本語教育向けの基礎資料となる言語データベース（以下コーパス）構築を目的として 1995 年度より開始された」（北九州市立大学国際環境工学部上村研究室のホームページ）ものである。

会話参加者は米国プリンストン大学の学生および現地在住の日本人（日本語学校校長および留学生）14名、及び国際基督教大学の在學生と学外の社会人40名である。コーパス全体では、100人のインタビュー会話が収録されているが、本稿ではその内の日本語母国語話者（NS）50人の会話スクリプトをデータとして用いた。収録時間数は、1人につき20-30分、あわせて785分（約13時間）である。会話の内容は2部構成で、第1部は面接者と被験者が一対一で話を進め、その被験者が大学生の場合は名前、専攻分野、将来の仕事について、社会人の場合は名前や仕事、住居などについて社交的ムードで話をすすめている。第2部では個人的意見や感想を引き出すことを目的に、テーマを社会的、時事的問題に関するものとしている。さらにロールプレイでは、引越し先でのゴミの捨て方などの情報収集、留守番電話を使った映画／旅行の誘い、約束事変更、アルバイトの応募といった4種類の場面設定をしている<sup>3)</sup>。

本稿では、上記の会話データをもとに考察をおこなうが、調査項目は主に、①「～アル／イル」構文形式のパターン、②主文末の形式、③引用節内の文末形式という3点に絞り、使用実態を精査していくこととする。なお、用例には、同一表現の重複もすべてカウントすることとした。



## 4 調査結果

## 4-1 全体的な使用傾向

本稿では、動詞「アル／イル」が用いられる構文の使用実態を調べるため、「ござる」「いらっしゃる」という敬語表現もひとまとめにし、議論の便宜上、「～アル」の各形態を「アル系」、「～イル」の各形態を「イル系」とまとめて呼ぶこととする。以上のルールに従い、前述のコーパスから、「アル系」「イル系」の文字列を含むデータを抽出した。これにより、1068例が得られた。その内訳を表2に示す。

表2 データから得られた使用分布の内訳

文末 \ 動詞	アル系	イル系	合計
ます形	361	37	398 (37.27%)
る形	526	84	610 (57.12%)
(ないです)	59	1	60
総計	946 (88.58%)	122 (11.42%)	1068 (100%)

(「ます形」には、「～ます／ました／まして／ません／ませんでした」が含まれる。)

(「る形」には、「～る／た／て／ない／なかった」が含まれる。)<sup>4)</sup>

表2では、まず「アル系」が946例(88.58%)であるのに対して、「イル系」は122例(11.42%)であり、「アル系」動詞の使用が「イル系」動詞をはるかに上回っており、顕著な違いが見られる。さらに、動詞の形式においては、「～ます」形の398例(37.27%)と比べて、「～る」形の使用は610例(57.12%)と優勢であることが分かる。「～る」形と「～ます」形の使用頻度も動詞別から見ると、「アル系」では55.6%対38.16%で、「イル系」では68.85%対30.33%となっており、ほぼ同じ差が見られるが、「～る」形がやや多く使われている傾向を示している。

なお、否定表現では、「アル系」の「～ないです」というやや特殊な表現は59例(84.28%)で、「～ません」という形の11例(15.72%)に対し優勢である。また、「イル系」では「～いない」の11例に対し、「～いません」はわずか2例にすぎず、「～ません」の用例数はわずかしは見られないことから、小林ミナ(2005)の調査結果とほぼ同一であることが分かる。

以上の結果から、従来の日本語教育で扱われた「～ます」形とは、著しく異なる傾向を示すことがうかがわれる。

#### 4-2 文型パターンの使用傾向

2-1 節でみてきたように、従来の日本語教科書では、「～アル／イル」構文は「～に～があります／います。」と「～は～にあります／います。」というきまったパターンとして、かつ文末が「～ます。」という裸の言い切りの形で扱われる傾向にあった。ところが、表 2 の調査結果を見ると、「～アル／イル」構文の 1068 例のうち、「～に～があります／います。」という文型に完全に一致した用例はわずか以下の 4 例しか見られなかった。(下線は筆者)

(11) はい。あの、こちらは、あの月火、月水金が生ごみとか燃やせるごみなんですけれども、あの、小学校の角のところに、あのごみ置き場があります。朝、結構、早く、あのー、収集車がくるので、9 時頃までには、お出しになった方がいいと思います。

(12) あのーお昼に休憩があります。

(13) あのー日本の雇用体系とアメリカの雇用体系、もちろん体系に一つ違いがあります。

(14) 一週間に三回、あの、生ゴミなんかの収集があります。

それ以外に、「～る」形の裸文末が 2 例見られる。

(15) 役所にいろんな立場というのがある。

(16) かなりこうノンフィクションにこう、触れる部分がある。

上例に示されるように、具象（実物）表現がただ (11) の 1 例だけである。しかも、「～います。」の用例は 1 例も見られない。

さらに、完全な「～は～にあります／います。」にあった実例も 1 例もない。しかしながら、そのパターンの代わりとして、次のような用例が見られる。(17) は「～ございます」、(18) は助詞脱落の例である。

(17) そうです。それは調布市にございます。(回答確認)

(18) あのね、あ、あ、あの、千里さん、ピアノのディーラーになってください。ピアノのディーラー。私ピアノの店にいます。私、ピアノを買いにきました。

以上の調査結果から、完全に「～に～が V。」と「～は～に V。」という文型に一致した表現形式は、1068 例の中にわずか 8 例 (0.65%) にとどまることから、会話の自然な流れでは

ほとんど用いられないということが分かった。

なお、その以外の 1060 例でその構文パターンを調査した結果を、下の表 3 に示す。

表 3 パターン別の形式

(「φ」は名詞項なし。「～φ」は助詞なし)

パターン	～に	～が V	～は	～に V
使用実態	φ	φ V	φ	～に V
	φ	～φV	φ	～には V
	φ	～が V	～φ	～に V
	φ	～は V	～が	～に V
	φ	～も V	～って	～に V
	φ	～とか V	～も	～に V
	～φ	～が V		
	～で	～φV		
	～は	～φV		
	～で	～が V		
	～で	～は V		
	～に	～は V		
	～に	～も V		
	～には	～が V		
	～にも	～って V		
	～は	～が V		
	～は	～は V		
	～は	～には V		
	～は	～も V		

表 3 から、助詞の組み合わせと名詞句の位置が固定したままの「～に～が V。」と「～は～に V。」の文型より、変化に富む他の構文パターン形式が圧倒的に多く用いられていることが分かる。以上の調査から、「～アル/イル」構文の使用実態は従来の日本語教育での扱い方とは、まったく異なる様相を示していることが明らかになる。

#### 4-3 文末の形式と使用傾向

水谷 (1985・2001)、メイナード (1993) は、日本語の発話においては、文末に終助詞「よ」「ね」や接続助詞「けど」「が」などが多く用いられ、それらを伴わない文末形式(「裸の文末形式」)はあまり用いられないとしている。そこで、全用例を主文末の後続要素の有無に注目して分類すると、まず「裸文末」と、「後続要素がつく」(以下「非裸文末」)の二通りに分けられる。「裸文末」とは、たとえば次のような言い切りである。(下線は筆者)

(19) いつでも話せるっていうことで安心感がある。

(20) このトウェルブモンキーというのは、本当に、ある？

(21) まあ他のところは別だったり、(うーん) 色々違いがありました。

(22) どこか、もしかしたら旅行に、っていうお話もありました、旅行なさるような時には、

(以上は「コーパス」)

表 1 に示したように、従来の日本語教科書の文例では、ほぼ全部「裸文末」の形式で扱われている。それに対し、「非裸文末」の場合は、次のような主文に終助詞や接続助詞、形式体言などが後続するか、または引用節や連体修飾といった文の構成要素として使われるのである。

(23) 最近お読みになった本でどんな本がありますか？

(24) うちで御飯を食べながらこう、一緒に観たりとかそういうことはありますけど

(25) あの、三鷹市とかは特に、それで、あの一、ええ銭湯もいっぱいあって。

(26) ああー、そうですか、そういうシステムが(ええ) あるんですねー。

(27) んふ、んふ、向こうまで出て行くのがなかなかないんで

(28) いいところもあって悪いところもあると思います。

(29) あの、よくあの、日本人のあの、人は割に大人になってもね自宅にいる人が多いんですけど

(以上は「コーパス」)

なお、「～ないです」の場合は、「～ない」が本来そのまま文末になりうるため、「～です」を後続要素とみなし、「非裸文末」の用例に数え入れる。その内訳は表 4 に示す。

表 4 文末の形式の内訳

	裸文末	非裸文末	合計
～ます形	52	346	398 (37.26%)
～る形	28	642	670 (62.74%)
総計	80 (7.5%)	988 (92.5%)	1068 (100%)

表 4 からみると、全体の結果では、「裸文末」の用例数がただ 80 例 (7.5%) であるのに対し、「非裸文末」は 988 例あり、全体の 92.5% を占めていることがわかる。そのうち、「裸文

末」の形式の場合は、「～る」形より「～ます」形のほうが優勢となっている。

なお、後続要素の形式に関しては、以下の 79 種類の形式が観察された。これらに文末昇調（終助詞なし）を加え、合計 80 種類の形式が見られる。

- (30) か／が／かとか／かな／かもしれないですけど／かも知れませんね／かもしれないですね／から／からね／けど／けどね／けども／けれど／けれども／けれどもね／し／そうです／そうなんです／たりして／たりするんですけど／て／でしょ／でしょうか／でしょうかね／でしょうか／でしょうけれども／でしょうし／でしょうね／です／ですか／ですねえ／ということで／な／なあ／ね／ねえ／のかな／のかもしれないですね／のかも知れませんねー／の／のですがー／のですね／のではないかな／みたいですけども／みたいですけどよ／ようですが／ようですけども／ようですよー／ようなんです／ようなんです／ようなんですけれどもね／よね／らしいんですけど／らしいですよ／わけでしょ／わけですが／わけですね／わけですよ／んじゃないですか／んじゃないか／んじゃないかな／んじゃないですかね／んで／んです／んですか／んですが／んですかね／んですけれど／んですけれども／んですね／んですよ／んですよね／んでしょ／んでしょか／んでしょかね／んでしょけれども／んのかかもしれないんですけども

(30) の集計で示されたように、文末にあらわれる要素は、「～あったと思うんだけど」という引用表現のほか、多くはモダリティを表す表現となっている。

中には、(23) のような「裸文末+か」の疑問形が疑問の特殊事情から、それを「裸文末」に、それとも「非裸文末」にカウントするかどうかの問題も生じる。そこで、特殊なケースとして改めて取り出すと、「裸文末+か」は合わせて 64 例あり、しかもすべて「～ます+か」の形式となっている。この 64 例を「非裸文末」として 988 例から除いたとしても、やはり 924 例すなわち 86.52%が見られ、全体の傾向はほぼ変わらないのである。つまり、表 4 の結果から、「裸の言いきり文末」が日常会話の自然な流れにおいて、めったに用いられないという傾向が見て取れる。

#### 4-4 引用節内の文末形式と使用傾向

主文末以外に、述語全体が引用節内かどうか注目し、その文末の形態を改めて見てみると、以下の (31) ～ (35) のような「～って／～と」で締め括る文の文末を観察すると、同じく「裸文末」と「非裸文末」の二通りが見られる。

- (31) そんな、僕はそんなことないと思うんですよ。

(32) そのキリストの姿っていうところまでいっちゃうとね、つまりただ光がある、っていうんだったらそれは非常にこう日本人にも救いが、あるんじゃないかと思うんだけれども、

(33) 日本について知ろうとした、と。そういうことがあったかとおもうのですが、

(34) ほんとになんか、時給も千円は当たり前みたいな時もあったよって言って、

(35) でいろんな人がいるなあって、(1: ああー、そうですか) その時に思いましたね。

(以上は「コーパス」)

なお、引用節内かどうかの見極めは、機械的な文字列検索では不可能なため、一つ一つ手作業で確認した。この作業により、非裸文末の 988 用例のうち、計 112 例を抽出し集計した結果、表 5 のようになった。

表 5 引用節内の文末形式傾向

	裸文末	非裸文末	合計
ます形 る形	— 83	— 29	— 112
総計	83 (74.1%)	29 (25.9%)	112 (100%)

表 5 から分かるように、引用節内では「～よ／な／か／んじゃないか」など後続要素を伴う文末が 29 例 (25.9%) であるのに対し、「裸文末」が 83 例 (74.1%) となっており、大部分を占めている。しかも、すべての用例が「～る」形で、「～ます」形は 1 例も見られない。

このことから、引用節内にかぎり、裸文末が多く用いられるということが分かる。

#### 4-5 考察で得られた結果

第 4 節をまとめると、以下の 3 点が指摘される。

- (i) 日常会話の自然な流れでは、従来の日本語教科書で提示された文型の形式がほとんど見られない。
- (ii) 「～ます」形の使用頻度は 4 割未満となっている。
- (iii) 後続要素を伴う文末形式は 9 割強を占めている。

## 5. 調査結果と日本語教育における扱い

以上、検証してきた使用頻度に関する結果から、日常会話では「～に～が V。」と「～は～に V。」という文型に完全に一致した形式は、わずか 0.65%しかなく、ほとんど見られないことがわかる。しかし他方で、それ以外の構文パターンが多く用いられる傾向が確認された。

こうした使用傾向は、文章展開における「は」「が」の循環性表現機能に深く関わるといふ林 (2007) の指摘を数量的に裏づけたものと考えられる。表 3 に示されたように、多様な構文となるのは、「は」「が」をベースにし、会話の文脈に応じ、他の名詞項と組み合わせた結果によるものであると考えられる。つまり、話し手が物事を言語で捉えようとする場合、まず「は」「が」に依拠し、他の名詞句は副次的な要素として扱うためであると考えられる。これが、多様な構文形式を生じさせる一因となっているのではないかと推測される。例えば、会話において、「～に～が V」の「～に」は、背景表現の役割も備えた機能を果たすために、背景知識と前提が共有する場面では、「～に」が省かれるのが自然な表現であるといえよう。

つまるところ、「～に～が V」と「～は～に V」との文型の対立は、「は」「が」と「に」「で」による名詞句との対立ではなく、文の外にある文脈と状況といったさまざまな要素への配慮と話し手の状況判断にかかわる問題である。すなわち、名詞句の有無と位置、そして助詞の取捨選択などは、「～アル/イル」との形式的かつ機械的な組み合わせた結果ではないと考えられる。それは、主題・非主題の対立、いわば「は」と「が」の意味機能の延長線上にある問題ではないかと推論できる。池尾 (1974) は、「は」の文法と表現との接点にある問題として存在文型の例を取り上げ、言語表現とその場面との関連性に触れている。そこから、学習者による不自然な表現は、「～に～が V」というような固定した文型に引きずられた結果であることも見のがせないことを示唆している<sup>5)</sup>。

これに関し、小林は「このような文型による導入では、学習者が、示された例文からどのようなルールを考えるか想定し、どんな誤解がありうるかを承知しておくべきである。1 つの文型の提示では、教室での機械的なパターンドリルは効率的にできても、文法の意味理解は不完全なままである。」(小林 2001:145) と指摘している。クラス内のドリルがうまくいくように見える一方、文脈状況を無視すれば、教室外で様々な誤解が生じかねないのである<sup>6)</sup>。

また、蓮池 (2004) の調査では、日本語教科書等では、「に」と特定の動詞との結びつきを強調しているため、中級レベルの学習者に「に」の顕著な過剰使用がみられることを指摘している<sup>7)</sup>。その背景には、文型の機械的な扱いによるものもあると考えられる。

こうして、これまでの教科書の扱いのように、「～に～が V」「～は～に V」という存在文型を、実際の場面を無視したままで学習すると、実際の談話展開での使用がぎこちない表現になってしまう恐れがある。従って、名詞句と助詞の有無、及びその位置の変化を、文型を固定化せずに、「は」「が」の機能との関わりを考慮して、文章展開の自然な流れの中でとらえなおしてみる必要があると考えられる。

次に、文末の使用実態に関する考察結果も、日本語の発話においては、文末に終助詞「よ」「ね」や接続助詞「けど」「が」などが多く用いられ、それらを伴わない裸の文末はあまり用いられないという水谷（1985・2001）、メイナード（1993）の指摘と一致したものである。

しかしながら、これまでの日本語教科書の扱いがこうした使用実態とかけ離れていることは上記の調査で示されている。さらに、「～ます」形より「～る」形のほうがより多く用いられているという実態も教科書には反映されていない。実際の使用と教科書の扱いとは大きなずれがあるといえるであろう。その原因として、「日本語教科書のほとんどが、普通体語形の導入に聞き手を考えない用法を使っている」と野田（2001:135）が指摘しているのと同様、2-1節で示した文型提示に見られるように、丁寧体の文末扱いにおいても聞き手を意識していない傾向があることによるものだと考えられる。

「日本語教育の場においても、文末に付加した助詞類についての説明はあっても裸の文末形式と他の要素を伴った形式との機能の違いという観点からの説明はほとんどないのが現状で、日本語学習者が接続助詞や終助詞を伴った形式を多用しすぎたり、逆に裸の文末形式を使いすぎたりして、自然な会話運びができないケースが観察される。」（上原 2004）とあるように、文型としてとらえやすく、パターンとしては覚えやすいが、場面と機能を見逃したドリルでは、不自然な表現につながるケースが多い<sup>8)</sup>。

ゆえに、存在文型の形式だけではなく、その表現に伴う各形式をいつ、何のために用いるかを把握し、習得することが必要である。その意味で、助詞の選択、そして文末の後続要素といった共起しやすい表現を伴った例文を示すことが学習者には大きな手助けとなる。また、こうした「～アル／イル」構文の多様な形式と文末の対応にどのような認知的要因が関与しているかの究明を今後の課題にしたい。つまり、文型の傾向差と文末形式の傾向差を統一的に記述・説明することが必要となる。

## 6. まとめ

2-1節でみたように、従来の日本語教科書における存在所在の扱いは、「～に～があります／います。」と「～は～にあります／います。」という固定化された形で提示されるのがほとんどである。この背景には、「体系的にまとめにくい『機能』より、体系的にまとめやすい『形式』を中心に記述する」（野田 2007:5）といった教育的、規範的な配慮があることが考えられる。

しかしながら、以上の調査結果から、日常会話では、「～に～があります／います。」と「～は～にあります／います。」という二つの文型とは異なる構文パターン、そして「文末+後続要素」などの表現が圧倒的に多く用いられることが明らかになった。本稿で得た調査結果を受け、とくに日常会話を重点にした日本語コースにおいては、「～る+後続要素」などの文末形式と「～ます+後続要素」をあわせて提示すべきであると考えられる。その理由は、とく



に日本国内の学習者の場合、教室外で耳にするのは圧倒的に「～る＋後続要素」の文末のほうが多いと予想されるからである。

また、話しことばで「～ます」形の文例を使う場合でも、その言語形式はどんな場面および目的で使用するのかを工夫し、存在文がどのような機能を持つのかを考慮しつつ、使用状況に合った定型的表現として導入する必要がある。例えば、①レストランの場面と、②場所を尋ねる場面の表現を見てみると、

① A「メニューを見せてください。」 →B「すみません、メニューありますか。」

② A「電話はどこにありますか。」 →B「この辺に電話ありませんか。」

のように、Aに比べ、Bの言い回しのほうがより自然かつ適切であると小林(2001:173)が指摘している。このように、単なる「存在・所在」というドリル練習だけではなく、存在文を使った要求表現、場所を尋ねる場面表現は、文型導入の段階ではより大切であると考えられる<sup>9)</sup>。ただし、口頭練習でどちらに重点をおくか、または運用するかに関しては、実際の場面に即した教育内容と、学習者の負担とを考慮する必要があるだろう。

それに先立ち、コミュニケーションための文法を教えるには、まず「文法項目が教室の外でのコミュニケーションに繋がる」(小林 2007:23)という目的を明確にすることが必要となる。その目的を踏まえ、存在表現の導入にあたり、教え方の工夫と見直し、具体的にいえば、場面に応じて、話の切りだし及び言いさし、言いよどみといった必要となる表現を盛り込み、明確な伝達効果・機能・文脈を生かす工夫が求められるであろう。

もちろん、存在文型の提示において、名詞句の有無と助詞の選択、又は文末の形式との共起関係をどのように取り扱うのかについては、実例のデータに基づいたさらなる検討が求められるであろう。この点に関しては今後の研究課題としたい。

## 注

- 1) 複数の初級教科書(『新日本語の基礎Ⅰ、Ⅱ』『みんなの日本語 初級Ⅰ、Ⅱ』スリーエーネットワーク、『日本語初歩』凡人社、『初級日本語げんきⅠ』The Japan Times)を調査した結果、「(場所)で(出来事)がある」という表現は会話や文法説明でとりあげられてはいるものの、文型練習に組み込まれているものはなかった。
- 2) 「日本語学の視点」に関する議論の詳細は野田(2007)を参照。
- 3) 小林(2005)では、言語コミュニケーションの一形態として、「日常会話」が①音声を媒体とするやりとりであること、②双方向のやりとりであること、③事前に準備されたやりとりでないことといった3つの特徴を指摘した。①は、小説中の会話文、電子メール、パソコンを利用したチャットなどと区別される。②は、聴衆に向かって一人が一方向的に話す講演やスピーチなどと区別される。③は、台本や脚本が存在するドラマ、演劇、テレビのトーク番組などと区別される。本稿の会話は

インタビューのやりとりであるが、①～③の特徴を揃えているという点から、「日常会話」と大差はないと思う。

- 4) 本稿の中心課題は、文末が「～ます」であるかどうかの対立を考察することである。そこで、本稿では、同じく丁寧体の「～です」と混同を避けるため、「丁寧体／普通体」を使わずに、「～ます」形と「～る」形と呼ぶことにする。

- 5) 池尾 (1974:6) は次のように指摘している。

「ある学生が次にあがる文型——『田中』という人の存在について述べる次の文（肯定・否定）——を既に習得しているとする。

田中さんがいます。

田中さんがいません。

では、実際の＜電話＞での会話の場面ではどうであろうか。

＜電話で A が B（会社の人）に、知人である田中の在・不在をたずねる＞

A: もしもし、こちら A ですが、田中さん□いらっしゃいますか。（または、いらっしゃいませんか）

B: はあ、おりますが、少々お待ちください。

日本語の初級の学習が終了した段階でも、実際に受話器を手にした場合、A の□の部分に『が』を用いる学生が意外に多いことに気づく。（中略）

したがって、日本人がどのような論理的条件または意識のもとで『は』を使うかが説明できなければ、学習者の『は』に関する誤用を防ぐことはむずかしい。」

- 6) 小林 (2001) は、「～に～がある」という文型導入について、「『が』は物の後につく。『は』は人につく」というような誤解は学習者に見られると指摘している。その原因として、存在文の課の前に習った名詞文や動詞文が「私は」「田中さんは」というように人に「は」のつく形が多いということが背景にあるとしている。また、学習者によっては、いったん自分で作った自分にとっては合理的なルールが深く定着して、なかなか修正できない場合もあるとしている。

- 7) 蓮池 (2004) は、中級及び上級レベルの韓国語母語話者と中国語母語話者、計 120 名を対象に場所を示す格助詞「に」、「で」、「を」の選択テスト及び助詞の使い分けに関する内省調査を行った結果、中級レベルの中国語母語話者に「に」の過剰使用の傾向が顕著であったことを示している。「入る」などの移動の動詞、「ある」という動詞、位置を示す名詞などを、「に」を選択する際のキーワードとして利用するという学習者の助詞選択ストラテジーが、「に」の過剰使用につながっている可能性があり、「に」は「で」より動詞と深く関わる性質をもつため、日本語教科書等で特定の動詞との結びつきが強調されやすいことが、学習者が「に」を場所を示す形式に結びつける要因のひとつとなっていると分析している。（蓮池 2004:52）

- 8) また上原 (2004) の研究では、自然談話をデータにして、裸の文末形式を普通体・丁寧体ともに取り上げ、普通体を対象としたメイナード (1993) の分析結果との対照、さらに終助詞などを伴った場合との対照を行い、その用法・談話上の機能について分析している。その結果、裸の文末形式は、「聞き手（との心理的距離）を意識するか否か」で、そのスタイル（丁寧か普通体か）に差はあるが、「話者が意図や情報を表明したり伝達したりするだけで足りる（それ以外の聞き手に対する含みなどを加えない）」場合に用いられることを指摘している。

- 9) 小林 (2001:162) は次のように指摘している。「初級の前半は、気持ちを反映した文法項目といっても、『は』『も』が教科書に現れる程度で、学習の中心は、やはり骨格に関わる文法、すなわち、

格助詞や動詞、形容詞の活用などである。あまり日本語らしくないぎこちない文が初級の教科書に多いのはそのためである。この段階では、いつその文を使うのかという使用の観点はあまり重要視されない。習った構文で事象を切り取るだけで、精一杯である。しかし、できれば実際に使用しても不自然にならない場面、機能を慎重に選んで、その中で『骨格を担う文法』も提示する工夫が必要である。」

## 調査資料

国際交流基金『日本語初歩 I』、国際交流基金、1984

坂野永理・大野裕・坂根庸子・品川添子・渡嘉敷添子『初級日本語げんき I』、The Japan Times、1999  
スリーエーネットワーク『新日本語の基礎 I』、スリーエーネットワーク、1990

スリーエーネットワーク『みんなの日本語初級 I』、スリーエーネットワーク、2002

「日本語会話データベースの構築と談話分析」(文部省科学研究費補助重点/特定領域研究「人文科学とコンピュータ」公募研究(研究代表者 上村隆一)研究成果)、1995-1998。[日本語会話データベースの内容は、北九州市立大学国際環境工学部上村研究室のホームページから閲覧することができる。]

## 参考文献

- [1] 池尾スミ『教師用日本語教育ハンドブック① 文章表現』、国際交流基金、1974
- [2] 上原聡・福島悦子「自然談話における『裸の文末形式』の機能と用法」『世界の日本語教育』、第14号、2004、pp.109-123
- [3] 久野暉『日本文法研究』、大修館書店、1973
- [4] 郡博子「「存在文」における「に格」と「が格」の語順について」上田功、砂川由里子、高見健一、野田尚史『言語探求の領域 小泉保博士古稀記念論文集』、大学書林、1996、pp.175-182
- [5] 国立国語研究所『話しことばの文型(1) 対話資料による研究』、秀英出版、1960
- [6] 小林典子「第9章 文法の習得とカリキュラム」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子『日本語学習者の文法習得』、大修館書店、2001、pp.159-176
- [7] 小林ミナ「日常会話にあらわれた「～ません」と「～ないです」」『日本語教育』125、日本語教育学会、2005、pp.9-17
- [8] 小林ミナ「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」野田尚史『コミュニケーションのための日本語教育文法』、くろしお出版、2007、pp.23-41
- [9] 白川博之「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77、日本語教育学会、1992、pp.36-48
- [10] 野田尚史「第7章 文法の理解と運用」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子『日本語学習者の文法習得』大修館書店、2001、pp.121-138
- [11] 野田尚史「コミュニケーションのための日本語教育文法的设计図」野田尚史『コミュニケーションのための日本語教育文法』、くろしお出版、2007、pp.1-20
- [12] 蓮池いずみ「場所を示す格助詞「に」の過剰使用に関する一考察—中級レベルの中国語母語話者の助詞選択ストラテジー分析—」『日本語教育』122、日本語教育学会、2004、pp.52-61

- [13] フォード丹羽順子「コミュニケーション能力を高める日本語教育文法」野田尚史『コミュニケーションのための日本語教育文法』、くろしお出版、2007、pp.105-125
- [14] 益岡隆志・田窪行則『基礎日本語文法—改訂版—』、くろしお出版、1992
- [15] 益岡隆志『日本語文法の諸相』、くろしお出版、2000
- [16] 三上 章『象は鼻が長い』、くろしお出版、1960
- [17] 水谷信子『日英比較 話しことばの文法』、くろしお出版、1985  
——『続 日英比較 話しことばの文法』、くろしお出版、2001
- [18] メイナード・K・泉子『会話分析』、くろしお出版、1993

(平成 22 年 5 月 23 日受付、平成 22 年 7 月 16 日再受付)